

なんだか わかんない 熱さが

山 田 有 信

奨励者紹介[やまだ・ありのぶ]

日本キリスト教団大阪淡路教会牧師

夜は更け、日は近づいた。だから、闇の行いを脱ぎ捨てて光の武具を身に着けましょう。日中を歩むように、品位をもって歩もうではありませんか。酒宴と酩酊、淫乱と好色、争いとねたみを捨て、主イエス・キリストを身にまといなさい。欲望を満足させようとして、肉に心を用いてはなりません。

(ローマの信徒への手紙 13 章 12—14 節)

キララキラ

今日の話のタイトル、これは「キララキラ」という8年前に放送されたアニメ番組があるんですが、そのオープニングテーマの歌詞から拝借しました。GARNiDELiA (ガルニデリア) というグループの「ambiguous」という楽曲で、meg rock という方の作詞です。私は今年、ネット配信サービスでこの番組が配信されているのをたまたま視聴して、とても興味を惹かれてハマってしまいました。その番組は、ざっくり言うと、主人公が学生服のような服を着て、人類を画一化・一様化して支配しようとする勢力と戦うという荒唐無稽な物語なんですが、特に面白いなあと思ったのは、主人公が着るその学生服のような服が人格をもって、主人公の血を吸収して戦闘力を上げて、主人公と力を合わせて共に戦うということです。

障害をまとう

私には筋ジストロフィーという持病があります。今のところはまだ治療法がありません。筋肉の一部が失われたり、変質することで徐々に筋力が低下する病気です。10 代の終わり頃に診断されました。あれからもう 40 年になります。診断がついた頃は、不自由なことはまだほとんどありませんでしたが、それでもそれなりにショックはありました。40 年経って、今はいろいろなことがだいぶ不自由になりました。ただこの間、病状は多少ガクッと急に進行したこともありますが、全体的には徐々に徐々に進行して今の状態になってきていますので、そのせいか強い喪失感のようなものを覚えたことはないんですね。

でももちろん、へっちゃらだったわけではありません。振り返ってみて一番しんどかったのは、大学を卒業して、ソフトウェア開発の会社で仕事をしていた頃です。満員電車で揺られて出勤して、会社でフルに働くというのは、やっぱり私の身体と、そして心には多少堪えることではあったのかもしれません。ある日の会社からの帰り道、一人最寄りの駅に向かう途中で、何だか足が急に重くなってしまって、しばらく立ち尽くしてしまったことを思い出します。それは必ずしも病気のせいではなかったかもしれません。病気を抱えながら、この世界で生きることを見失っていたようにも思います。

キリストを身にまとう

先ほど読んでいただいた聖書箇所は、パウロという人が認めた文書の一部です。パウロは「主イエス・キリストを身にまといなさい」と言っています。パウロが会ったイエス・キリストという人は、すでに十字架につけられて処刑されてしまっていたんですが、パウロにとっては今もなお十字架の上からパウロを眼差している、そんな救い主だったようです。でも、その救い主を身にまとうというのは、一体どういうことなのでしょう。偉い人が説いた教えを信じるとか、立派な人の行いに共感してその行動にコミットするとかいうようなことなら、分かり易いのですが、パウロは「身にまとう」という表現をしているんですね。どうしてなのでしょう。

もしかしたら、それを身にまといさえすれば、誰でも何者かになれるというようなことなのでしょう。もしそうだとしたら、それはまるで一般的なユニフォームやコスチュームのようなイメージなのかもしれません。「光の武具」(12節)という言葉のパウロはここで使っていますが、それさえ着れば、誰でもなんとなく何か素晴らしい集団の一員になれるかのような、そういうことをパウロは勧めているのでしょうか。

そうではないと思うんですね。イエスという人がなぜ十字架で処刑されたのかということを考えると、とにかくキリストという「光の武具」を身にまといなさい、そうすれば、誰もが救い主^{あやか}に^{あやか}なることができるというようなことをパウロが勧めているとは、私には思えません。

イエスは、その当時のローマ帝国の支配のもとで、搾取され苦しめられていた貧しい人々に、あなたは帝国を維持するために生きるのではないということを告げました。イエスは、当時の神殿を中心とした宗教システムの中で蔑まれていた病人や障がい者などの人々に、あなたは宗教システムを支えるための捨て駒の一つなどではない、ということを告げました。新約聖書のマルコによる福音書は、イエスがその活動の始めに、「神の国は近づいた」と告げたと記していますが、イエスの言う「神の国」という言葉の中身は、「あなたはあなたなのだ」ということだと私は考えます。帝国民の一人でも、宗教システムを支える一員でもなく、誰もが「神の国」のかけがえのない「あなた」なんだとイエスは信じて告げたんだと思うんですね。だから、帝国も神殿の側も、その存在基盤を揺るがすようなことを民衆に説くイエスを、生かしておくことはできなかったのだと思います。

ならば、パウロが言う「キリストを身にまといなさい」ということも、ただキリストを中心とする組織の一員になりなさいとか、それさえ身に着ければ何者かになれるというようなことでは決してないはず。パウロが伝えたいのは、「あなたはあなたでありなさい」と告げたキリストを、あなたらしく着こなさなさいということだと思います。あなたというかけがえのない一人の存在の、血の通った装いをまといなさいということだと思うんです。

なんだか わかんない熱さが

私のこの不自由な身体は、自分ではどうすることもできません。「障がい」と名付けるならば、確かに文字通り邪魔なものですし、もし失くすことができるのなら、脱ぎ捨てることができるなら、そうしたいとも思いますけれども、そういう訳にもいきません。でもその一方で、私にとっては、少なくとも今のところは、私という一人の人間を装う血の通った何かであるかのようにも思うようにはなりました。

若い頃、会社で働いていたある日、帰宅の途中で立ち尽くしてしまった時、私は病気という何か「私」自身を決定的に損なうものだと考えていたと思います。この世界には、病気の自分の居場所などないかのように、自分自身で思い込んでいたに違いありません。

でも、その後私は、いつか、どこかで、誰かを通して、何かを介して「あなたはあなたでよいのだ」という声を聴いたのだと思います。いつだったのか、どこだったのか、誰だったのか、何だったのか、それは必ずしもはっきりしません。たぶん、何人かの友、何人かの隣人、書物や作品との出会いを通して、その声が語りかけてきたのだと思います。「あなたは、あなたでよいのだ」。気が付くと、キリストと呼ばれる人から放たれる「なんだか わかんない 熱さ」が、私の頬を伝っていました。

「キリストを身にまといなさい」。パウロのこの言葉は、キリストというあなたをたった一人のあなたとして見ている、そんな相手を自分らしく着こなして、そして、この世界と一緒に旅するための、血の通った自分の身体の一部であるかのようにして、世界に一人しかいない、かけがえのない「あなた」らしく、いつもその相手と共に生きなさいということだと私は思います。

祈ります。

祈り

恵み深い聖なる神さま、目には見えなくても、私たちの身体や心にはいくつもの傷があって、その傷からたくさんの血が流れているように感じます。主よどうか、その傷口を包み、痛みを和らげ、傷を癒すための衣となってください。流れ出ている血を無かったものにすることなく、その血が、その衣をよりよいものとし、一人ひとりが自分らしく着こなせるようなものとすることができますように。イエスの傷ついた身体と傷から流れる熱い血を、どうか、私たちみんなを生かす力としてください。

主の名によって祈ります。アーメン。

〔注〕

1 2013年10月から2014年3月までMBS・TBS・CBC・BS—TBS『アニメイズム』B2にて放送。T RIGGER制作。

2021年12月22日 今出川水曜チャペル・アワー「アドベント礼拝奨励」記録